

鳥海物語⑥ (全6回)

—安倍氏統治期—

平谷 美樹

わたしは鳥海柵の段丘である。

安倍氏は滅んだが、生き延びた者もいた。そのなかに、藤原経清という武将の妻子もいた。経清の妻は敵である清原武貞の妻となり、息子も引き取られた。後の奥州藤原氏初代清衡である。清衡は父の敵であった源頼義の子、義家の力を借りて、清原氏を滅ぼす。そして、絢爛たる平泉文化の礎を築くことになる。

鳥海柵もなくなり、住む者もおらず、わたしは寂しい数十年を過ごした。

ある日、十数人の者たちが現れ、わたしの上を掘り始めた。わたしは興味津々、その者たちの行動に注目した。彼らは穴に経文の入った壺を埋納し、塚造った。経塚である。

十数人の中に、身分の高そうな女が一人いた。もしかすると、あれは奥州藤原氏二代基衡の妻となった、安倍宗任の娘であったかもしれない。父の一族の慰霊のために経塚を建立したのだろうか。それから長い長い年月が経った。

そして、わたしの上には田圃が残った。これから公園として整備されていくらしい。

そう。忘れるところであった。わたしの上に咲くのは梅が相応しいという話である。

「わが国の梅の花とは見たれども 大宮人はいかがいふらん」

貴族が、捕らえられた安倍宗任を馬鹿にして、梅の花を差し出し「これは何か？」と問うた時に返した歌である。

「わたしの国では梅と呼ぶ花だが、都の人はなんと呼ぶのであろう」

貴族のくだらないからかいに對して、知的に上回る歌でからかい返す。なんとも愉快な話ではないか。

わたしの上では、矜持をもった古人が生きていた。現代を生きる蝦夷の末裔たちも、かくあつて欲しい。

わたしの上になびく稲の緑を愛でながら、はらはらと散る桜を愛でながら、古人に思いをさせて欲しい。

完